

コロナワクチン関連情報とBICOMによる治療

～ワクチン、スパイクタンパク、情報共鳴の視点から～

目 次

第1部 コロナワクチン関連情報とBICOMによる治療 (ザビーネ・ラウホ医師の講座より)

1. コロナワクチン
2. コロナワクチンのリスク
3. BICOMを用いた検査と治療
4. 症例紹介
5. まとめ

第2部 エネルギー医学に関する講座

1. 電磁波の生体への影響とその治療

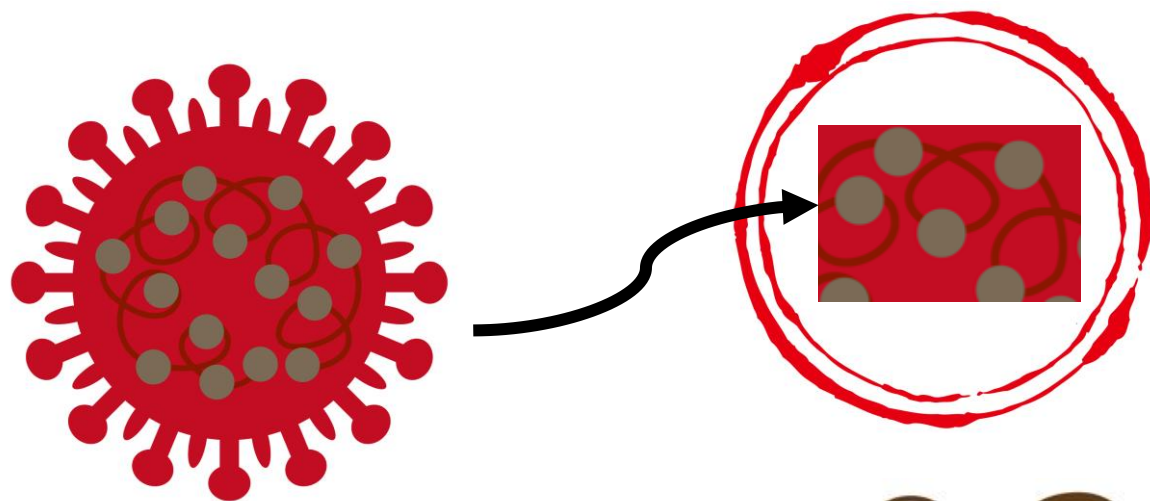
第1部 コロナワクチン関連情報とBICOMによる治療
(ザビーネ・ラウホ医師の講座より)

コロナワクチン

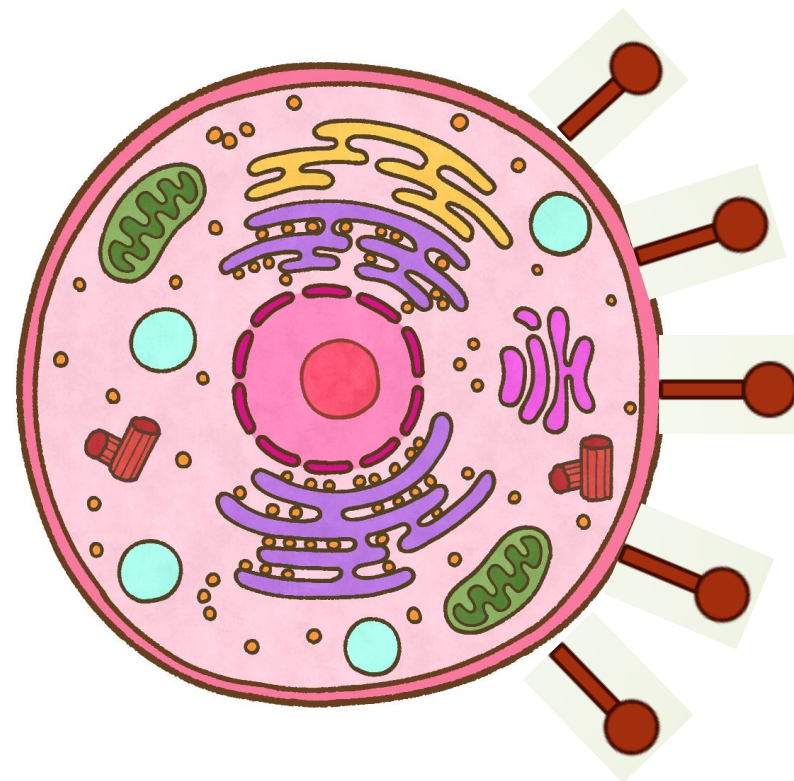


コロナワクチンとは

従来型の不活化ワクチンとは
まったく異なる原理

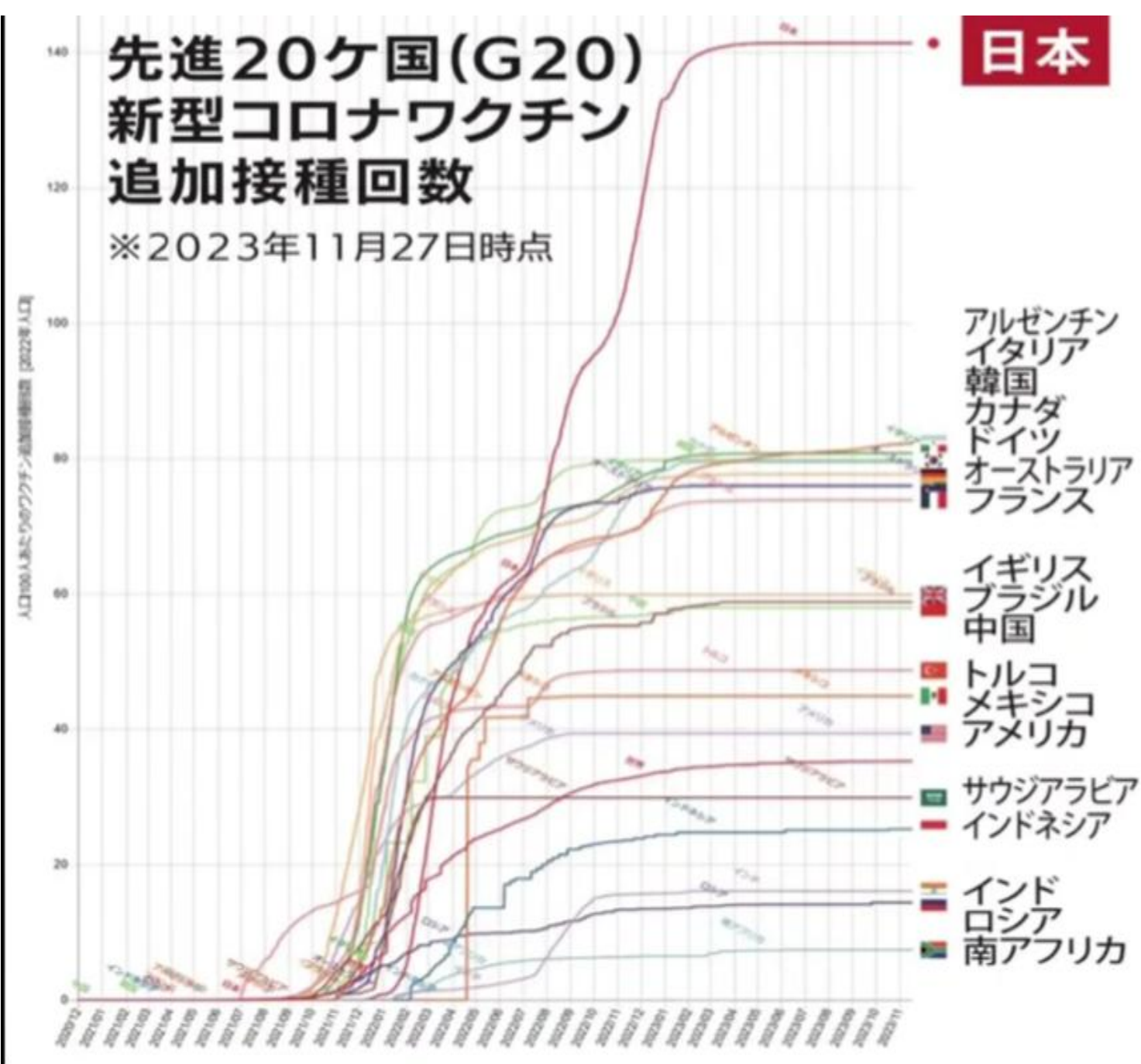


ウイルスの中のRNAを
取り出して、体内に注入



自分自身の細胞がスパイク
タンパクを作り始める

コロナワクチン 接種回数は 日本がトップ



コロナワクチン のアンプル

- ・ ウイルス全体の情報を持たない不完全な構造
- ・ すべての患者さんにチェックすべき重要情報
- ・ 感染防御よりも情報の影響に注目が必要



第1部 コロナワクチン関連情報とBICOMによる治療
(ザビーネ・ラウホ医師の講座より)

コロナワクチンのリスク



mRNA「ワクチン」のリスク

- Where? どの臓器でスパイクタンパクが作られるのか？
- How much? どのくらいの量のスパイクタンパクが作られるのか？
- How long? どのくらいの期間スパイクタンパクが作られ続けるのか？

これらは何一つわかっていない。

mRNA「ワクチン」のリスク

修飾RNA (modRNA)

- ウリジンが800か所以上でシュードウリジンに置換されている。
- mRNAに対する身体の正常な炎症反応が阻害される。
- modRNAは通常のmRNAより効率的に読み取られ、その結果、より多くのスパイクタンパクが産生される。
- modRNAは分解されにくく、分解する酵素が作用しない。
- modRNAは90日経過してもリンパ節胚中心でスパイクタンパクの産生を引き起こし続けることが証明されている。

mRNA「ワクチン」のリスク

カチオン性脂質から作られた脂質ナノ粒子

- ・ 筋肉の細胞間隙から組織液を介してリンパ系を通じて除去される。
- ・ リンパ節がフィルターステーションとして機能する。
- ・ 血流を介して輸送される。
- ・ 脂質ナノ粒子は体内のどこにでも付着し得るため、有毒作用や異常な炎症反応を引き起こす可能性がある。
- ・ 活性酸素種（ROS）の形成を促進し、それが細胞DNAやミトコンドリアを損傷する。

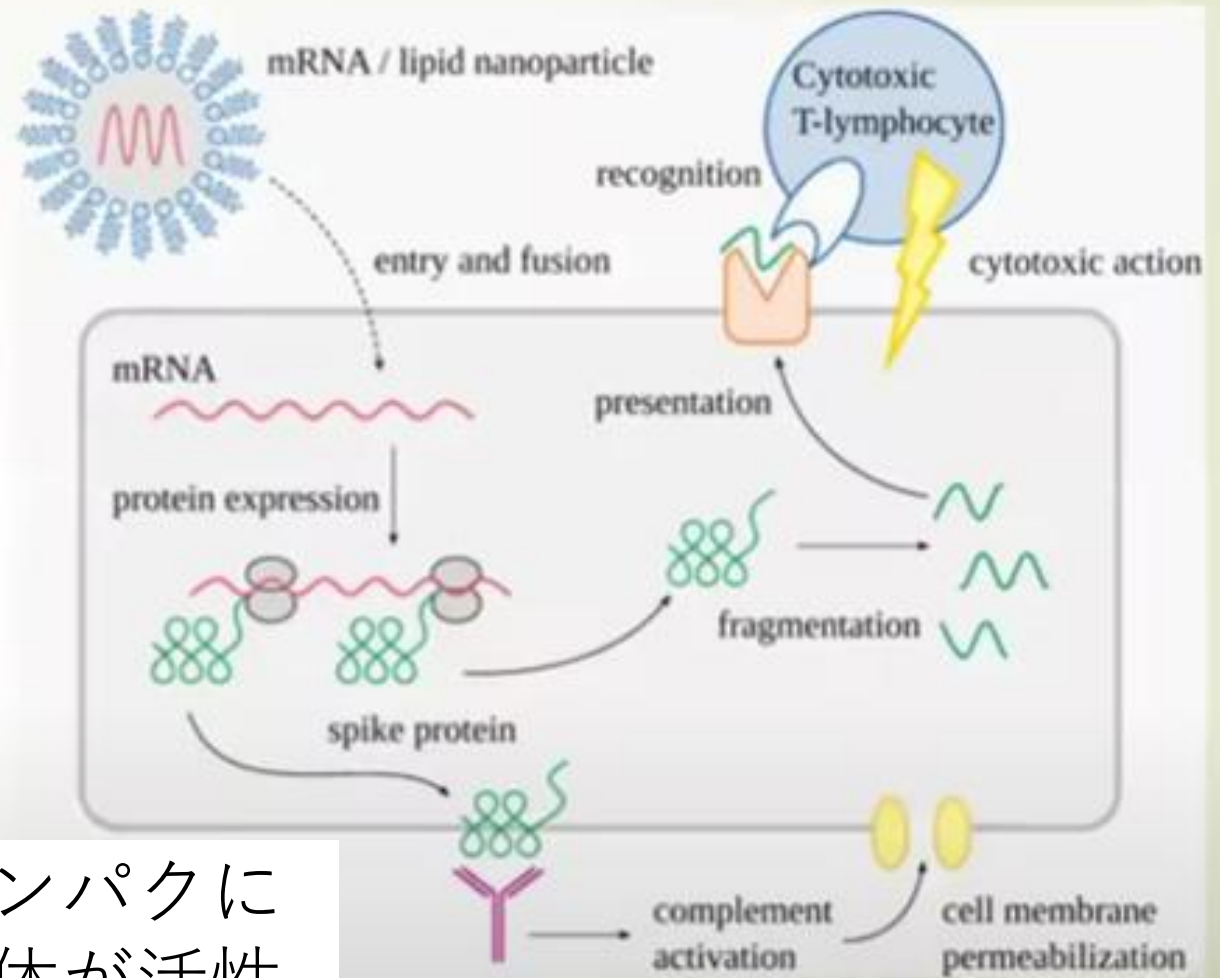
スパイクタンパクのリスク

- SARS-CoV-2スパイクタンパクは人体にとって異物であり免疫系の反応を引き起こす。
- 細胞表面でのスパイクタンパクの提示は抗体産生をもたらすだけでなく、細胞の排除（死）も引き起こす（心臓、肝臓、腎臓、脳などで発生）。
- 血管壁の内皮細胞を破壊する。
- スパイクタンパクの毒性作用により血液凝固がおこり、血栓症が誘発される。

How mRNA vaccines provoke immune attack on our own cells and tissues

細胞表面のスパイクタンパクに対して抗体ができ、補体が活性化され、細胞膜透過性が増す。

T細胞が細胞表面のスパイクタンパクを認識して攻撃する。



まだあるさまざまなリスク

- ・ modRNAはDNAに逆転写され、人間のDNAに組み込まれる。
- ・ 製造の過程で、DNA(プラスミド)が混入し、人間のDNAに組み込まれる。
- ・ 産生される抗体が、中和抗体ではなく、抗体依存性感染増強(ADE)を起こす抗体になる可能性がある。
- ・ 体内に存在するさまざまな微生物を再活性化する。
- ・ 副腎疲労をはじめとしたさまざまなホルモン異常をきたす。
- ・ 電磁波に対する過敏性が高まる。

波動医学の観点から見たリスク

- ワクチン自体、エネルギーブロックをきたす作用が強い。
BICOMの治療原理そのものがエネルギーブロックを取り払うことなので、ワクチンの情報を除去することは治療において絶対に必要なこと。
- 接種回数に比例して情報が蓄積していく。摂取回数が多いほど、ワクチンアンプルに共鳴しやすい傾向が高まる。
- ワクチンの情報はあらゆる臓器に存在しうる。
特に、脳へのワクチン情報の蓄積は脅威。

波動医学の観点から見たリスク

- ・ 情報のシェディングを引き起こす。
ワクチンの情報そのものが人から人に伝播される。
これはスパイクタンパクという物質を介したものととは限らない。
- ・ 情報が伝播することで、未接種者や犬にもワクチン情報が見つかる（猫や馬は少ない）。
- ・ 環境中にワクチンの情報が蔓延している。
特に医療施設や公共交通機関に多く見られる。

第1部 コロナワクチン関連情報とBICOMによる治療
(ザビーネ・ラウホ医師の講座より)

BICOMを用いた検査と治療



BICOMを用いた検査の基本方針

治療家としての準備

- ・ 自分自身にワクチンやスパイクタンパクの情報があるかどうかをチェックする。
- ・ これらの情報に共鳴する場合は、あらかじめ治療しておく。

検査の実際

- ・ 環境中に存在すると考えられる情報はすべてチェックする。
- ・ すべての患者さんに対して、ワクチンとスパイクタンパクの情報をチェックする。接種歴が一度もない患者さんにもこの検査は必要。
- ・ 患者さんが来院するたびに必ず毎回チェックする。

BICOMを用いた治療のステップ

1. ベーシックプログラム
2. 瘢痕と電磁波障害の除去(PS10314)
3. 排泄臓器活性化(PS10046)
4. Prog3137（ストレス軽減）、Prog3093～Prog3095（ショック治療）をしばしば用いる。
5. ワクチンアンプルを用いた治療

チャンネル 2：深いリラクゼーション（神経学）、
副腎虚弱（内分泌系）、ワクチン接種サポート（その他の病原体）、
Silica D30、Thuja D30（ホメオパシー療法）

バイオレゾナンスセラピーの原理

- ①体内では細胞同士がさまざまな情報を交換し、コミュニケーションを取っている。
- ②体内に毒素（あるいはブロックとなる情報）が侵入し、正常なコミュニケーションを妨害する。
- ③バイオレゾナンスセラピーにより、毒素（あるいはブロックとなる情報）を排泄し、正常なコミュニケーションを取り戻す。



ワクチンアンプルを用いた治療

- ・ 治療に必要なアンプルの組み合わせをチェック
- ・ 増幅率と治療時間の決定
- ・ チャンネル2で使うプログラムの決定
(・ 必要なピンクアンプルの組み合わせをチェック)

治療プログラム

Prog191/197、Prog963、Prog998、PS11311など

ワクチンアンプルを用いた治療

- ・ 治療に必要なアンプルの組み合わせ、増幅率と治療時間は来院するたびにチェックする。
- ・ 4回目以降のセッションではPS10325を使うことが多い。この場合、増幅率や治療時間をテストする必要はない。

☆PS10325のプログラム構成

Prog3151.0 + Prog157.0 + Prog691.0

ワクチンアンプルを用いた治療

ここ2～3年で行われるようになった治療法

- ・インプットカップに患者さんの血液を入れる。
患者さんの血液の中には接種したワクチンの情報が必ず含まれている。
- ・血液と同時にワクチンのアンプルをインプットカップに入れ、共鳴するかどうかをテストする。
- ・血液＋ワクチンアンプルを入力情報として、AiまたはDiで治療する。

レプリコンワクチン

- ・レプリカーゼと呼ばれる酵素が細胞内でmRNAを複製し、スパイクタンパクを作り続ける。
- ・接種した人の呼気、汗に含まれる細胞外小胞（エクソソーム）による周囲への人達へのシェディングの危険性が従来型ワクチンの100倍以上になる可能性がある。
- ・ベトナムにおける治験の報告(2024年5月)では、第3相の治験に参加したワクチン接種者8059名のうち5名が死亡し、118名に重篤な有害事象が報告されている。
- ・現在、世界で承認されているのは日本のみ。
- ・「コスタイベ注」のアンプルは現時点で作成されていない。

第1部 コロナワクチン関連情報とBICOMによる治療
(ザビーネ・ラウホ医師の講座より)

症例紹介



50代
女性

ブレインフォグ、偏頭痛

令和5年にコロナウイルスに感染。それ以降、ブレインフォグがひどく、偏頭痛もときどきある。コロナワクチンを接種した人と接する機会は多い。テンソルによる検査で、コロナウイルス(+C25)、コロナワクチン(C-BP21)ともに陽性。

これらのアンプルを用いた治療2回で、ブレインフォグはかなり改善し、偏頭痛もいまのところ起こっていない。ただし、好転反応で前胸部に多数の皮疹が出ている。



60代
女性

胃部不快感、食欲不振、全身倦怠感

令和3年にコロナワクチン2回接種。以後、全身倦怠感、食欲不振がひどかったが、2か月くらいで回復した。

令和7年1月に嘔吐をきっかけに、のどから胃にかけてのつかえ感がひどくなり、食欲がまったくわかなくなつた。全身倦怠感もひどく、この状態が半年近く続いている。

テンスルによる検査で、コロナウイルス(+C25)、コロナワクチン(C-BP21)ともに陽性。

これらのアンプルを用いて、胃部にハンマーをあてて治療した。5回の治療で食欲不振はかなり改善し、食べ過ぎが気になるくらいになった。



40代
女性

顔のピリピリした痛み

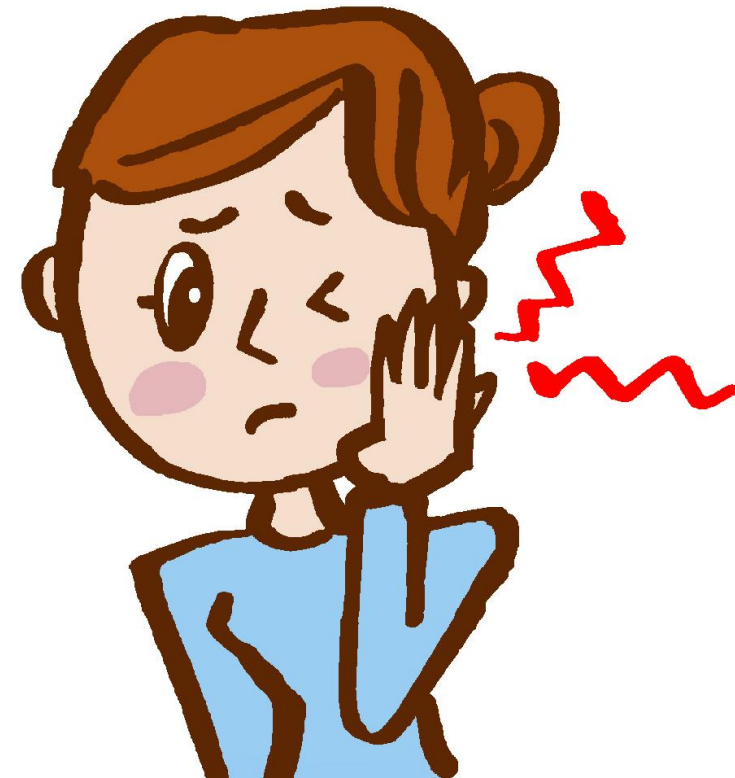
コロナワクチン接種歴なし。

令和5年ころから顔のピリピリした痛みを感じ始めた。ある時に特定の人と接したときに症状が強くなることに気付いた。

テンソルによる検査で、
コロナワクチン(C-BP21)が陽性。

このアンプルを用いて治療すると、顔の痛みは消失した。

ただし、特定の人と接すると同じ症状が戻ってきて、再度同じ治療。症状が再発するたび、同じ治療を繰り返している。



まとめ



湯川クリニックでの治療成績

- ・基礎疾患がなく、コロナワクチンの接種あるいはシェディングが主な要因と考えられる病態は、2～4回程度の治療で著しい改善が見られた。
- ・軽症の基礎疾患のある患者さんの場合は、コロナワクチンのアンプルを用いた治療を含め、他のプログラムによる治療を加えるため、治療回数がより多くなっていた。
- ・慢性疾患でも、重篤な疾患（癌、自己免疫疾患、神経変性疾患）の場合は、コロナワクチンの治療はほぼ必須である。ただし、それだけで改善するわけではないので、他の治療プログラムを含め、包括的な治療が必要と考えられた。

結語

- ・ コロナワクチン、スパイクタンパクは強いエネルギーブロックの原因となる。
- ・ エネルギーブロックはあらゆる臓器に起こりうる。
- ・ ワクチンの情報のシェディングが起こりうる。
- ・ あらゆる疾患に対して、繰り返しの検査と治療が必須。
- ・ 自分自身のエネルギーを高めることが治療家として必要。

第1部

END



第2部

エネルギー医学に関する講座

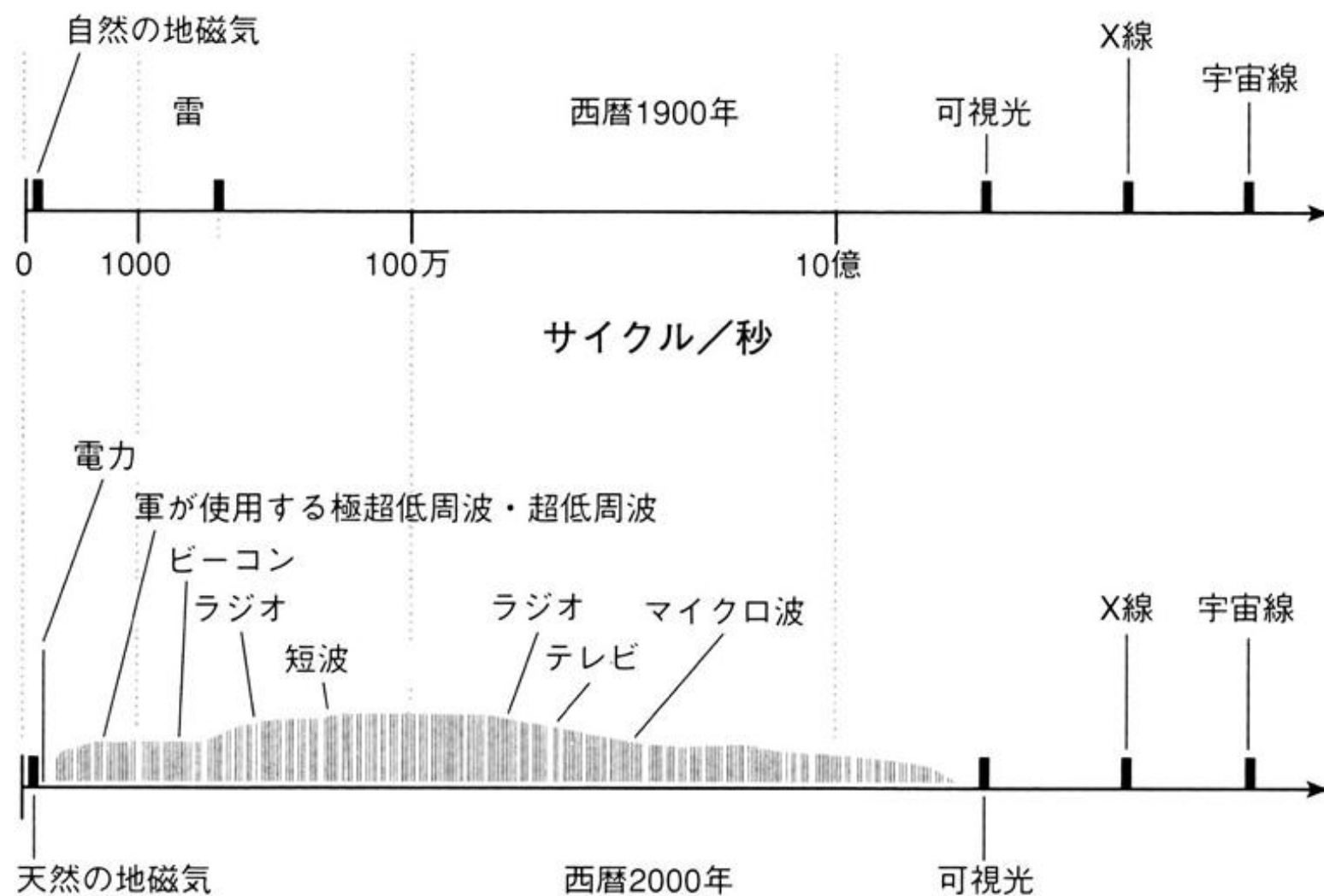
電磁波の生体への影響とその治療



人工的電磁波のスペクトル

- ・世界中の人々が不自由なく電気を使えるようになったのはほんの **100**年前。
- ・現代は電気を利用した機械や技術が無数に開発され、私たちはそれらを当然のように使っている。
- ・西暦**1900**年と**2000**年を電磁波スペクトルを比較した図をみると、現代がいかに異常な環境になっているかがわかる。

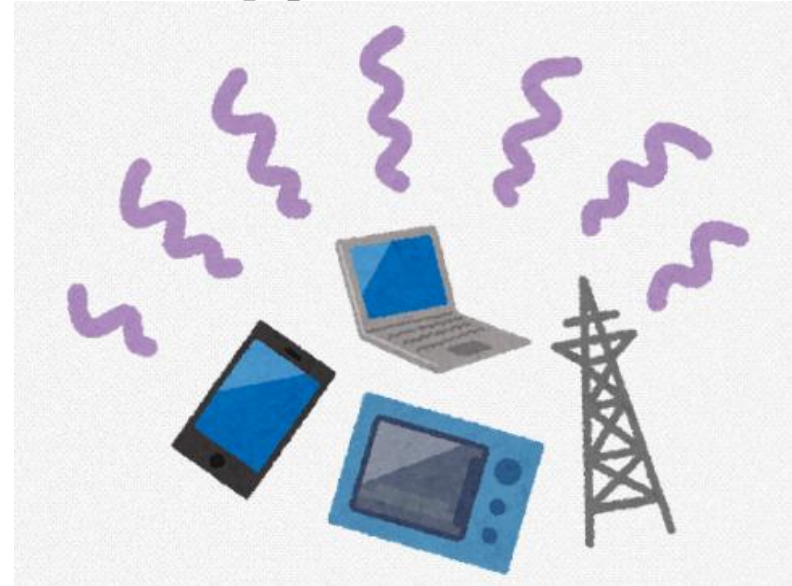
西暦1900年と西暦2000年の電磁波スペクトル



出典「エネルギー
医学の原理」

電磁波の生体への作用

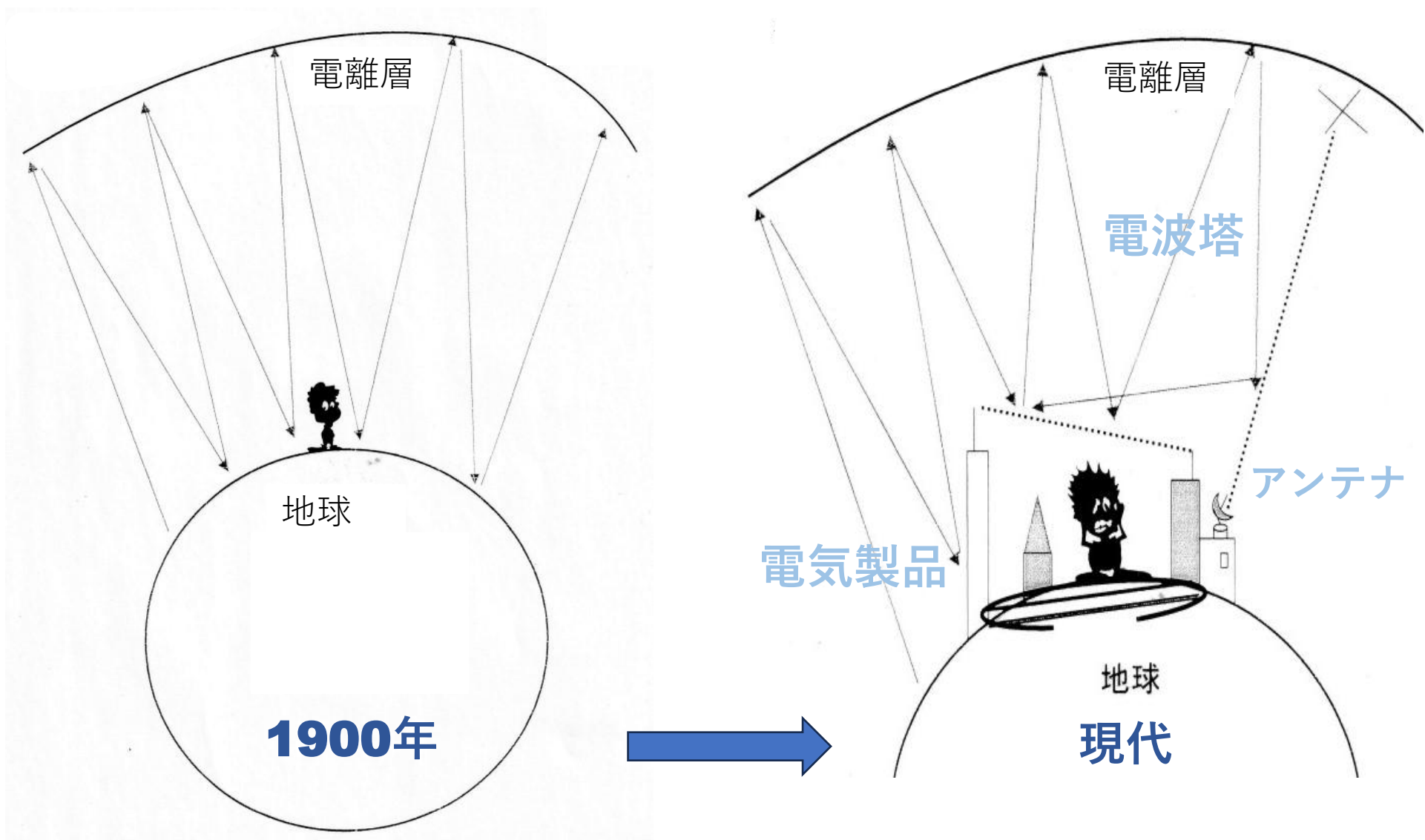
- ①刺激作用：体内への電磁誘導による中枢神経系や末梢神経系への刺激効果。主に低周波で起こる。
- ②熱作用：体内吸収による温度上昇。主に高周波で起こる。
- ③非熱作用：生体内の細胞活動に対する作用。



生体は電磁波の影響を受けやすい

- ・水の構造に異常をきたし、水によって運ばれる信号の異常をきたす。
- ・タンパク質やDNAには水素結合が多く含まれるため、情報の混乱がおこりやすい。
- ・カルシウムイオンチャンネルの異常をきたす(16Hz)。
- ・神経伝達物質がうまく働かなくなり、思考や創造性が失われる。

人工的電磁波は地球からの健康な波動を妨害する



BICOMでの電磁波障害の治療

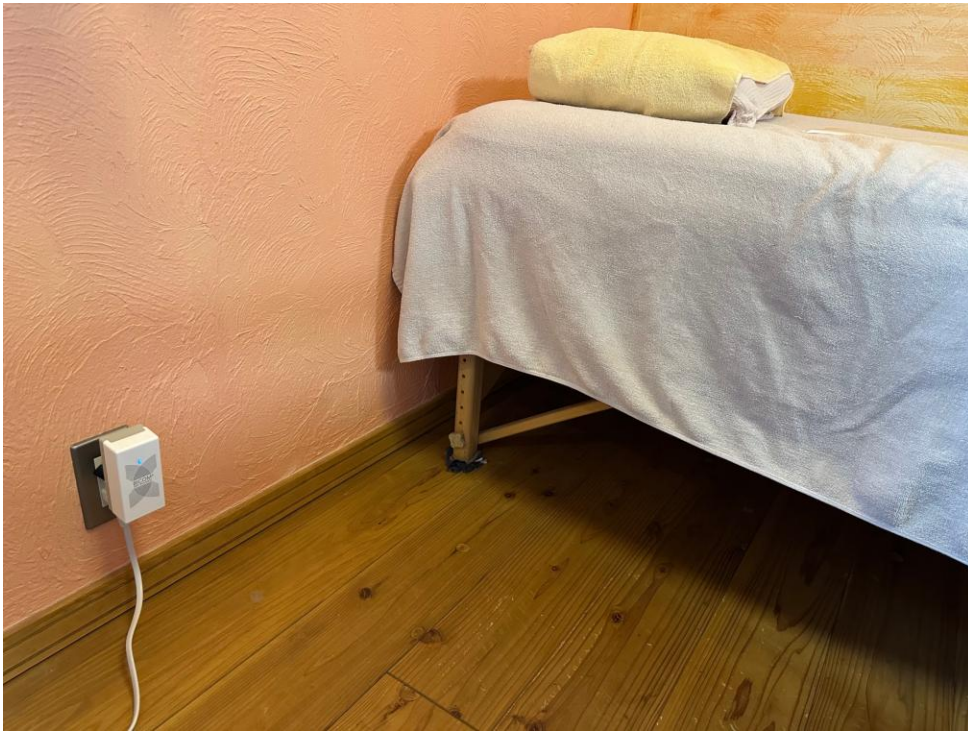
- ・ 主な治療プログラム：Prog701.1、701.5、702
Prog471、3017、3137
- ・ 主なプログラムシーケンス：PS10160、PS10451
- ・ チャンネル 2：電磁波カテゴリーから選択
- ・ アンブル：5 G balance
- ・ DMI



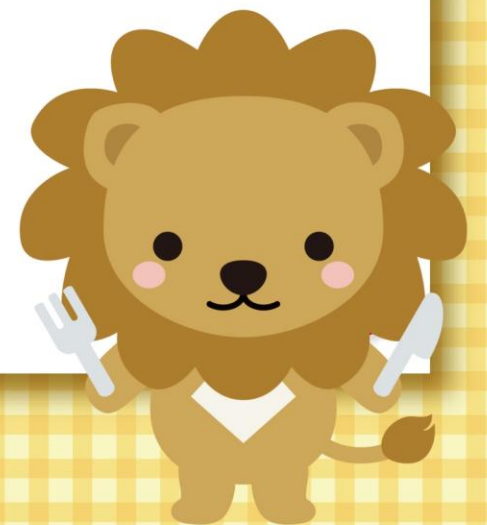
電磁波障害が治療されていないと、他のエネルギー的治療が効きにくくなる。

BICOM EMF バランス

BICOMを使う環境を整える装置。
電磁場をバランスよく制御する
メカニズムが組み込まれている。



Information





BICOM勉強会

第3回

アレルギー治療再考

アレルギー疾患の治療は、BICOMの最も得意とするところです。コース1・2ではアレルギーのさまざまな治療法を紹介してきましたが、もう一步踏み込んだ視点からお伝えしたいと思います。

12月17日(水) 午後8時～

END

